

○ 帰宅前の留意事項

- ・シャワーで鼻、耳の中まで洗う。着ていた衣類等はビニール袋にまとめて入れ、口を閉じ、その場で廃棄または浸漬消毒後ビニール袋に入れて持ち帰る。
- ・シャワー設備がない場合は、洗顔後、全身を消毒薬（クエン酸等）で噴霧後、着ていた衣類を全て着替え、頭と首にタオルを巻く。着ていた衣類等はビニール袋にまとめて入れ、口を閉じ、その場で廃棄または浸漬消毒後ビニール袋に入れて持ち帰る。手指消毒後、解散する。
- ・解散後は、寄り道をせずに直帰し、直ちに、作業服、通勤服／靴、ビニール袋を全て漬け込み消毒（家庭にあるハイターで可）し、シャワーを浴びる。ビニール袋は可燃ゴミとして廃棄可。
- ・防疫作業従事期間中及び作業終了後7日間（又は3日間※）は畜産農家、動物園、ペットショップ等の偶蹄類動物がいる施設に立ち入らない。また、畜産関係者との接触を控える。

※ バイオセキュリティ措置が適切に実施されていることが確認されている場合

○ 帰宅後の留意事項

- ・帰宅後、外傷や体調不良がある場合は、医療機関を受診し、県対策本部総務班（農政企画課）に様式12により報告すること。

■ 4 防護服の着衣方法

○ 防護服一式

防護服、ディスポキャップ、ゴーグル、マスク、薄手の手袋、厚手の手袋、長靴



① 防護服を2枚着る。
防護服下の作業服が
見えないよう、チャック
を上まで上げる。



② 内側の防護服を、長靴
の中にしっかり入れる。



③ 外側の防護服を、長靴
の外側に出す。



④ ガムテープを4枚用意
する。



⑤ 隙間がないよう、裾を
ガムテープで密着させ
る。



⑥ 帽子の中に、髪・耳を
入れる。その後マスク
をつける。マスクと顔の
間に隙間がないよう密
着させる。



⑦フードをかぶる。



⑧ゴーグルを装着する。



⑨薄手の手袋をはめる。



⑩厚手の手袋をつけ、手袋裾部分をガムテープで密着させる。



⑪防護服前後に、所属・氏名を大きく記入。



⑫係名をラッカーで記入。農場内に入る長靴に、ラッカーで印をつける。

■ 5 防護服の脱衣方法



①手袋部分と長靴部分のゴムテープを外し、ゴミ袋へ入れる。

②厚手の手袋をはずす。③ゴーグルをはずす。



④外側防護服のチャックを一番下まで下げる。

⑤フードを後ろへ下げる。

⑥内側の防護服に触れないように注意しながら、外側の防護服を裏返ししながら下まで脱ぐ。



⑦防護服を長靴ごと踏み脱ぐ。決して長靴を脱いでから防護服は脱がない。

⑧マスクをはずし、フードをはずす。

⑨薄手の手袋をはずす。汚れた面で、自分に触れないようにする。

■6 動員者の動き(1日の流れ)

- 1 集合場所に集合し、バスで受付会場まで移動、または受付会場に直接集合
- 2 受付
- 3 健康相談所へ移動（希望者のみ）
健康相談（血圧、体温測定）：保健師等
- 4 チーム編成、作業内容説明
あいさつ、作業内容、進捗状況等について説明。
- 5 作業服への着替え、サンダルに履き替える。
- 6 農場又は埋却地へバスにて移動
- 7 現地テント到着（発生農場周辺：清浄区域）
班分け、現場リーダーから作業内容と留意事項の説明。
- 8 防護服、長靴等を受け取り、防護服一式を着用する。
- 9 農場又は埋却地入場。
- 10 農場内作業
- 11 休憩は農場内（トイレは農場外）
※ 農場（汚染区域）から清浄区域へマニュアルどおり移動した場合には、再度入場する際、8、9、10の繰り返し。
- 12 退場（退場時は全身消毒）
- 13 脱衣、手洗い・うがい、移動時の服へ着替え、サンダルに履き替える。
バスの乗車直前に履き物接地面を消毒する。
- 14 バスで現地対策本部の受付会場に移動。
- 15 サンダルを脱ぎ、手指消毒、更衣、解散、帰宅。



【バスで受付会場に集合】



【作業内容等の説明】

9 発生農場での防疫作業

■1 発生農場事前調査

1 先遣隊

先遣隊は、発生農場での殺処分・埋却・消毒などの防疫措置が迅速かつ計画的に実施できるよう、病性鑑定確定後直ちに農場に立ち入りし、事前調査票（210ページ）に基づき調査を行う。なお、農場に立ち入る際は、農場からのウイルス飛散防止に十分留意する。

先遣隊の編成は、家畜防疫員（獣医・畜産）、~~県~~普及センター職員（動員サポート班）、埋却に詳しい県農業土木技術職員（埋却班）の4名を基本とし、必要に応じて市町村職員、建設業協会等を加えるものとする。

家畜防疫員（獣医・畜産）及び県職員（農業土木担当）は、その後引き続き、発生農場内及び埋却地で実施する防疫措置の現場リーダーとなる。

2 事前調査票の作成

- (1) 発生農場の平面図を作成し、汚染区域と清浄区域を区分した後、清浄区域には資材置き場用テント兼作業員の更衣用テント（現地テント）並びに簡易トイレを設置するための場所を事前調査票（210ページ）に記載する。
- (2) 清浄区域と汚染区域の境界（防疫ライン）に、農場に出入りする人、車両等を消毒する動力噴霧機（複数台）を設置する。埋却地が離れている場合は埋却地の出入り口にも動力噴霧機を設置するようその台数を記載する。
- (3) 農場の構造を考慮して殺処分方法や殺処分の場所、死体搬出の動線を記載、また、死体搬出のためのフォークリフトやローダー、ダンプカー等の台数を記載する。
- (4) 農場の堆肥、家畜排せつ物及び飼料等の搬出に必要な機材を記載する。
なお、殺処分に使用したローダーを引き続き搬出用として使用できれば、それを除いた機材（特装ダンプ等）を記載する。
- (5) 農場、埋却地ともに防疫フェンスの設営が必要なときは、平面図に設置場所を記載する。
- (6) 防疫措置に必要な獣医師数や保定員、作業員等の人数を割り出し記載する。
- (7) 防疫措置に必要な資材の種類・数量を記載する。
- (8) 埋却に必要な重機及び資材を記載する。
- (9) 消毒に必要な水、消石灰やブルーシートの必要量を記載する。
- (10) その他必要と思われる事項を記載する。

3 設置場所の選定に係る留意事項

(1) 現地テント設置場所

ア 現地テントの設置場所は、従事者移送車（バス）や防疫作業従事者が出入りする経路と、農場から搬出される家畜・汚染物品などの動線が交差しないよう選定する。

イ 雨天時に雨水でテントの床が浸水し、防護服などの資材が濡れないような場所を選定する。

(2) 農場出入り口の選定

ア 農場の出入り口が複数ある場合、可能な限り出入り口を1か所とし、その他は封鎖する。なお、出入り口には、防疫作業従事者や防疫作業車等を消毒するための動力噴霧機が設置可能な場所を選定する。（*使用水の確保）

(3) 殺処分場所の選定

ア 殺処分前の家畜の移動が容易で、殺処分作業や死体の積み込みなど重機の作業が容易な場所を選定する。

イ 農場外から殺処分・死体の搬出作業等が見えにくい場所を選定する。やむを得ずそのような場所がない場合は、防疫フェンス等で外部から見えない処置を講じる。

ウ 生体の移動と殺処分、死体の搬出等、これらの一連の作業を交互に行なえるよう殺処分場所を複数選定する。

エ 殺処分作業が容易に行えるよう不要物品の排除を農場主に依頼する。

オ 牛の繋留や豚の囲い込み等の改良が可能な場所を選定する。

(4) 農場環境の確認

ア 農場周辺の土地所有者に防疫作業への理解が得られているか確認する。

イ 農場の配水や配電、排水経路等を確認する。

ウ 防疫作業に活用可能な農場所の器具及び重機等について、利用の協力を農場主に確認する。

(5) 報告・打合せ

ア 調査票に機材や資材の数量等必要事項を記入し現地対策本部に帰庁。

イ 調査内容について県対策本部へ報告し、今後の防疫作業について詳細な打合せを行う。

4 事前調査票

事前調査票は耐水紙を使用し、調査内容を記入後、現地にて消毒後水洗洗浄する。

なお、農場から埋却地までの経路、従事者移送バスの経路を別に地図に記入する。

5 農場及び埋却地に係るゼンリン地図

農場立入時には、防疫作業事前調査票のほかに、農場及び埋却地に係るゼンリン地図を携行する。

6 農場主の心のケア

農場主は口蹄疫発生に伴い、心理的に不安定な状態になっていることが多いため、丁寧な説明及び聞き取りを行い、農場主の心理的負担を軽減させるように努める。

■2 殺処分

1 事前準備

ア 殺処分前日に、発生農場の飼養頭数及び先遣隊により作成されている事前調査票を確認し、必要資材（殺処分用資材と防疫資材は別々に）を準備する。殺処分班は、当日に割り当てられた動員者数を勘案して班編成されるが、特に豚の場合は使用する資材が処分の方法により異なるため、班ごとに殺処分セットとして適宜資材を準備するよう留意する。また、防護服等の防疫資材が不足することを想定し、予備として公用車に常備しておく。

イ 発生農場での殺処分・埋却・消毒などの防疫措置がスムーズに行えるよう、現地防疫班（防疫調整係、殺処分・農場消毒係）、埋却班、動員サポート班の各リーダーは、事前にミーティングを行い、殺処分方法、班分け、担当畜舎と人員の割り振り、資材や重機の台数、配置等の情報を共有しておく。また、作業時も適時情報共有できるよう、無線機等を確保しておく。

2 殺処分当日の準備及び殺処分時の留意事項

ア 家畜防疫員は、当日朝、家保の資材倉庫から、事前に準備されている殺処分用の資材を再確認し、公用車へ積み込んだ後、農場へ出発する。その他の防疫資材は、現地対策本部の資材班により農場へ搬送される。

イ 農場に到着したら、テントの設置場所や道路の封鎖状況を確認する。また農場付近に茶畑や作物等が栽培されている圃場があれば、風による消石灰の拡散に留意し、粒状石灰を準備する。さらに、発生農場における防疫ライン及び動力噴霧機と水道の設置場所を確認する。また、冬場はホース内に滞留した水の氷結に留意する。

ウ 殺処分場所は、基本的に事前調査票に基づき選定する。しかし、当日配置された動員者数及び重機等を勘案し、重機と動員者の動線、視界の明暗、天候及びスペース等を考慮し、畜舎内外で、他に適当な場所があれば変更する。その際、処分場所や死体が外部から見通せる場所であれば、目隠し対策として、ブルーシートや寒冷紗により遮蔽する。畜舎外で殺処分する場合には、繋留場や金属製の柵及びコンパネ等による囲いを活用し、殺処分する家畜の逃走防止を図る。

エ 資材班により防疫資材が搬入されたら、資材の数量等を確認し、不足している場合には直ちに資材班へ連絡する。

オ 動員者が農場へ到着したら、獣医師、保定者、動員者、オペレーターに対し、ホワイトボード等を活用して作業の流れを説明する。この際、ウイルスの拡散防止のため、防疫ライン遵守の徹底を図る。

カ 殺処分は、発症している家畜を優先的に実施し、殺処分後、当日埋・焼却できない場合は、死体へ消毒薬噴霧後、石灰を散布しブルーシートで覆う。その後、速やかに埋・焼却すること。

3 畜種毎の殺処分方法

(1) 牛(水牛を含む。)、山羊、羊(薬殺)

ア 牛（水牛）、山羊、羊については、キシラジン製剤の注射による沈静後、と殺用薬液（以下、薬液）の静脈内投与により殺処分する。牛の殺処分では、保定及び

殺処分時に従事者が負傷する可能性が高いため、家畜防疫員は、動員者の安全面に配慮した指揮監督に努める。また、水牛は、牛の殺処分に準じて実施するが、頸静脈の確保が極めて困難であることに留意する。なお、使用する薬液は発生状況等を勘案して選択する。

(ア) 準備資材

- ① 10mlシリンジ 1本／10頭 または 20mlマイエル連続注射器 2本／1班
- ② 30mlシリンジ 3本／10頭（薬液用：2種類の薬液を使用する場合は倍量）
- ③ 18G針 2本／1頭
- ④ セーフティ針（マイエル連続注射器用） 1ダース／100頭
- ⑤ キシラジン製剤 3ml／1頭（繁殖農家） 4ml／1頭（酪農・肥育農家）
- ⑥ 薬液 100ml／1頭（容量は〔モノ、ビス（塩化トリメチルアンモニウムメチレン）〕ーアルキル（C9.15）トルエン水溶液を成分とする逆性石けんの場合）
- ⑦ 頭絡（鼻環がない場合）頭数分
- ⑧ ロープ（10～12mm×100m） 3m／1頭
- ⑨ 15Lバケツ（薬液用・水道水用・ゴミ箱など） 3個以上／1班
- ⑩ 針入れ容器（ペットボトル、薬液容器等で応用）
- ⑪ 踏み込み消毒槽（移動用のシリンジ・針入れ） 1個／1班
- ⑫ かご 1個／1班
- ⑬ 90Lゴミ袋 十分な量
- ⑭ ラッカー（色は体色に対して映える色を選択）

(イ) 方法

① 牛の保定

ロープを頭絡や鼻環及び角に連結させ、鉄柵や鉄柱等に繫留する。保定の際に暴れる牛などには、キシラジン製剤を少量（成牛：1～2ml）筋肉注射し、鎮静後に繫留する。牛の繫留は、牛同士の間隔が広いと牛が動いて危ないため、あまり間隔を空けないようにする。ただし、薬液注入後牛が倒れるだけの余裕は開けるようにする。

また、頭数が多い、パドック飼いの肥育舎では、あらかじめパドック内の繫留場所を数カ所選定し、その箇所へ肥育牛を集めるために重機等や人手により追い込み、肥育牛の逃走による事故に留意しつつ、上記のとおり鉄柵や鉄柱等に繫留する。

また、連動スタンションの場合は、スタンションで保定した後、1頭毎にロープで繫留し直し、全て繫留し終えた時点でスタンションのロックを解除する。スタンションにかけたまま殺処分すると、首が挟まって搬出が困難となるので注意する。

② 薬剤の準備

牛が繫留されている間に、10mlシリンジまたは連続注射器にキシラジン製剤、30mlシリンジに薬液を吸引する。なお、薬液は、1頭に数本のシリンジを使用することから針付き及び針なしのシリンジの両方に吸引しておく。

③ 鎮静

キシラジン製剤を、頸部または臀部に筋肉内注射（成牛：3～5ml、子牛：1～2ml）する。効果が認められない場合には、2ml程度追加で注射する。

④ 薬殺

鎮静効果がみられた後（5分程度）に、薬液を頸静脈に速やかに注射する。成牛で60～90ml、子牛で30mlが致死量と考えられる。成牛の場合は、1本目を注射した後に、針を残してシリンジを外し、薬液入りの針なしシリンジを再び装着する。獣医師は注射を開始したら、牛が転倒する危険性があることを大声で周知する。また、安全の面から、薬剤を注入する獣医師、牛が転倒する前にロープを緩める保定者、牛を横から保定しながら転倒時に注意喚起する獣医師もしくは保定者の3人1組で行動することを基本とする。牛が転倒後、検死を行い、重機により埋却地または搬出場所まで運ぶ。

(ウ) 必要人員

畜舎構造等により必要人員及び班編制は異なるため、一例を以下に示す。

①和牛繁殖牛舎1棟200頭規模（連動スタンション、フリーバーン）埋却地は場外を想定した場合の例

防疫リーダー（獣医師、畜産職員）	各1名
殺処分動員者	獣医師 5名
	薬液充填等補助 3名（動員者）
保定 専門職	10名
搬出 ビニールシート係	5名×2班 10名（動員者）
	消毒係（搬出ダンプカーの消毒）2名（動員者）
	（農場退出時の防疫ラインでの消毒）2名（動員者）
重機オペレーター	フロントローダー2台 2名
搬出用ダンプカー	3台 3名

※ 殺処分は、獣医師1名1時間当たり6頭と想定すると7時間で殺処分終了。

この際、ビニールシート係は、まず、ダンプの荷台にビニールシートを広げる。また、ローダー等で家畜を荷台に乗せ終わった後にビニールシートを折り返して家畜を包み病原体の拡散防止対策を講じる。

その後、消毒係がダンプの荷台を中心に、まんべんなく車両の消毒を行い、更に農場を出て埋却場所に向かう際にも防疫ライン（農場の衛生管理区域境界）でも車両消毒を行って搬出する。

②最大規模農場での殺処分の例

飼養頭数4,800頭 畜舎数70棟の肉用牛一貫経営

1日8班×3日間で殺処分を終了と想定（1,600頭/日、200頭/班 5頭/時間/人）

防疫リーダー（獣医師、畜産職員）	各1名	} ×8班＝272名×3日 (1日当たり8時間従事)
殺処分動員者	獣医師 5名	
保定 専門職	10名	
動員者	17名	
埋却、重機オペレーター	20名 ×3日	
保健師	2名×3日	

小計 294名

清掃消毒 2日間で清掃消毒を完了と想定 35棟/日 (1棟1班16名で実施)

防疫リーダー (獣医師、畜産職員) 1	}	×35班	35名
自衛隊 15名		×35班	525名
埋却、重機オペレーター 20名		×2日	

小計 580名

合計 874名

イ 殺処分時の留意事項

- (ア) 保定者は、牛が恐怖心を抱かないよう、扱いには十分注意する。また、ロープによりゴム手袋が破損しやすいため、ゴム手袋に重ねて軍手を着用する。肥育牛など、大型のものに対しては、複数の従事者で移動や保定を行う。さらに、ロープにより牛を移動させる際、ロープを手に巻きつけている状態で牛が暴れだしたら、保定者が転倒する可能性があるため、いつでも手からロープを離せる状態で保持すること。
- (イ) 照明不足等の悪条件により頸静脈の確保が困難な場合や、経験の乏しい獣医師は、頸部にロープを掛け、駆血帯として用いる。また、死亡確認は確実に実施し、少しでも息があれば薬液を追加投与する。
- (ウ) 薬液用のシリンジを頻回使用すると、ゴムの劣化による薬液飛散の可能性があるため、適宜交換する。また、薬液が目に入った場合、角膜等を損傷することがあるため、眼鏡もしくはゴーグルを必ず着用する。万が一目に入った場合は、直ちに水洗し眼科医の診断を受ける。

(2) 豚(薬殺、電殺、ガス殺)

- ア 豚の殺処分は、飼養状況及び畜舎環境を勘案し、薬液(発生状況を勘案して使用する薬液を選択)による薬殺、電殺器を用いた電殺、炭酸ガスによる窒息(ガス殺)を選択して行う。基本的に、繁殖豚は薬殺もしくは電殺、種雄豚は電殺、哺乳豚はガス殺、肥育豚及び離乳豚はガス殺もしくは電殺を選択すると、効率的な殺処分を実施することができる。哺乳豚は、豚舎内で殺処分した後搬出できるが、それ以外の豚は、殺処分後の搬出で手間どることから、豚舎外で殺処分する。

イ 殺処分時の留意事項

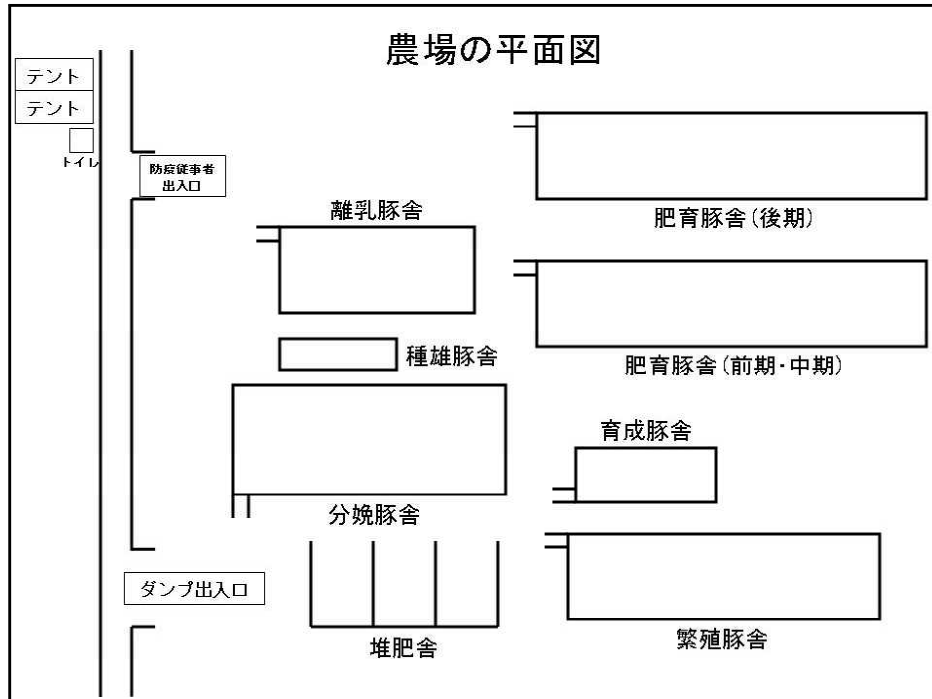
- (ア) 繁殖豚は白色の防護服に対し恐怖心を抱く傾向があるため、豚の移動時にはコンパネを使いコンパネの陰に隠れるなど、可能な限り豚の目に留まらないよう留意する。また、肥育豚の追い出しでは、防護服が破損することが多いため、前掛けの着用や防護服の2枚着用により対応する。
- (イ) 麻酔を用いない豚の移動は、囲いの外部へ逃走しないよう、動員者に対し注意喚起する。
- (ウ) 殺処分方法に電殺やガス殺を選択した場合でも、麻酔薬、注射器、注射針、ベニューラ針、薬液等の最低限の薬殺用資材は準備する。
- (エ) 雨天時の屋外での電殺は感電することもあることから十分注意する。

ウ 豚の殺処分の実例

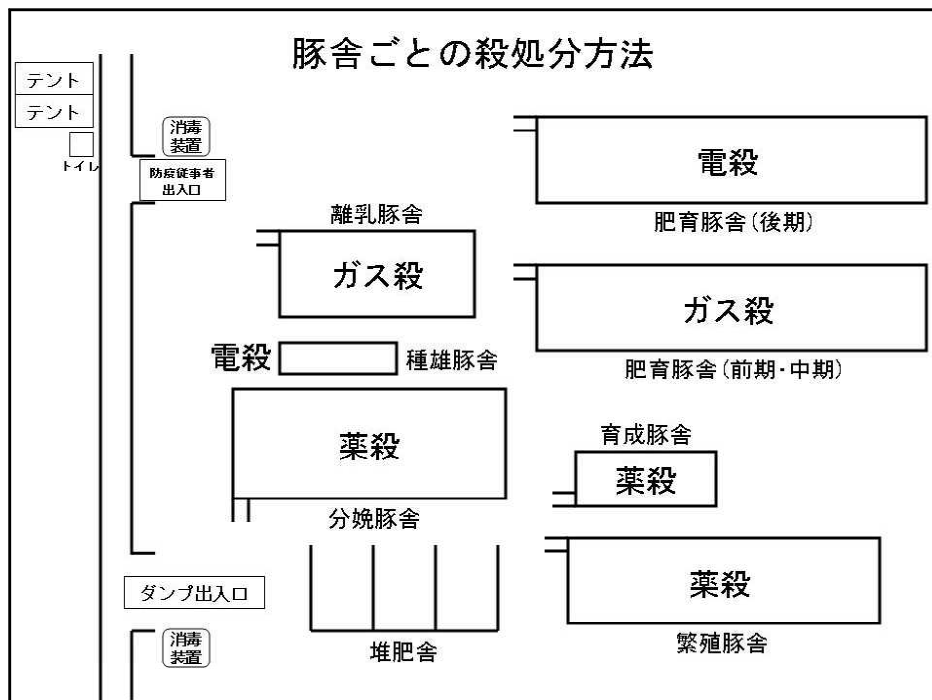
豚の殺処分は、農場によってその方法が異なることから、以下に実例を示す。

(設定条件 経営形態：一貫経営、埋却地：農場外)

- 1 飼養規模 母豚300頭、育成豚20頭、種雄豚30頭
哺乳豚500頭、離乳豚500頭、肥育豚2,000頭 計3,350頭
- 2 農場形態 農場平面図のとおり



- 3 殺処分方法（処分対象）：薬 殺（母豚、育成豚、哺乳豚）
電 殺（種雄豚、肥育後期豚）
ガス殺（離乳豚、肥育前中期豚）



4 殺処分実施場所 下図のとおり

(1) 薬殺チーム

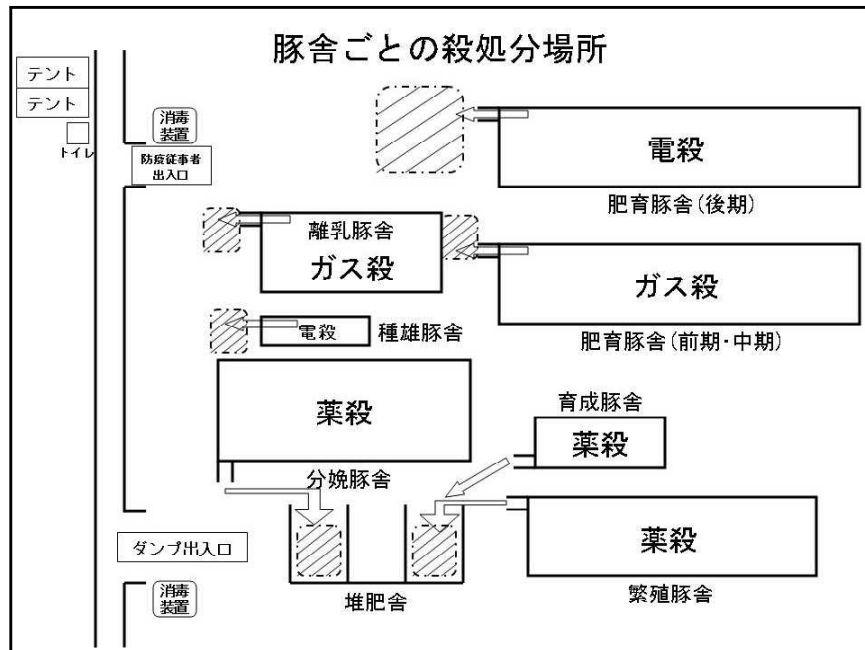
分娩豚舎、繁殖豚舎、育成豚舎の母豚 → 堆肥舎へ移動させ、薬殺
分娩豚舎の哺乳豚 → 豚房内で薬殺

(2) 電殺チーム

肥育豚舎の肥育後期豚、種雄豚舎の種雄豚 → 豚舎前のスペースへ移動後、
電殺

(3) ガス殺チーム

離乳豚舎の離乳豚、肥育豚舎の肥育前・中期豚 → フォークリフトに取り付けた
大型ケージを豚舎入口に横付けし、そこへ移動後、ガス殺



5 必要人員 家畜防疫員、畜産職リーダー 各 1名

獣医師 16名

保定（追い出し） 25名

動員 50名

薬殺チーム	—	獣医師	10名
		保定（追い出し）	5名
		動員（コンパネ）	10名
電殺チーム	—	獣医師	5名
		保定（追い出し）	10名
		動員（コンパネ）	10名
ガス殺チーム	—	獣医師	1名
		保定（追い出し）	10名
		動員（ガス、シート）	10名
消毒・搬出チーム	—	動員	10名
資材チーム	—	動員	2名
埋却チーム	—	動員	8名

- 6 必要重機 バケットローダー4台（薬殺、電殺各2台）
4t箱型ダンプ6台（薬殺、電殺、ガス殺各2台）
大型ケージ付フォークリフト2台 ※すべてオペレーター付き

7 殺処分

(1) 薬殺チーム（分娩豚舎、繁殖豚舎、育成豚舎の母豚）

ア 必要資材

- ① 豚保定器（トンキーパー、ワイヤー）：多数
- ② 薬液：30ml／1頭（容量は〔モノ、ビス（塩化トリメチルアンモニウムメチレン）〕ーアルキル（C9.15）トルエン水溶液を成分とする逆性石けんの場合）
- ③ メシル酸マホプラジン製剤：5～15ml／1頭（繁殖豚、種雄豚）
- ④ 20mlマイエル連続注射器：2本／1班
- ⑤ 豚針またはセーフティ針：1ダース／100頭（繁殖豚、種雄豚、肥育豚）
- ⑥ ペンチ：1個／1班
- ⑦ 10mlシリンジ：1本／10頭
- ⑧ 20mlシリンジ：1本／10頭
- ⑨ 18G注射針：1本／2頭（哺乳豚）
- ⑩ 21G注射針：1本／1頭（耳静脈用）
- ⑪ カテラン針：1本／2頭（繁殖豚、種雄豚、肥育豚）
- ⑫ ベニユーラ針（14G：1本／2頭（繁殖豚、種雄豚、肥育豚）
- ⑬ 使用済み針入れ（多量の医療廃棄物がでるので大きいもの）
- ⑭ コンパネ（取っ手付き）：囲いに十分な枚数
- ⑮ ラッカー（麻酔済み標識用）
- ⑯ 畜舎内で殺処分する場合に、準備できれば選果場用ローラー
- ⑰ バケツ（薬液用・水道水用・ゴミ箱など） 3個以上／3班
- ⑱ 90Lゴミ袋：十分な量

イ 方法・手順

(ア) 麻酔

繁殖豚に対しては、メシル酸マホプラジン製剤5mlを筋肉内注射する。種雄豚の場合は同剤15mlを筋肉内注射する。

(イ) 薬剤の準備

10mlシリンジもしくは20mlシリンジに薬液を準備する。注射針は対象豚に応じてそれに合った針を適宜準備する。

(ウ) 殺処分場へ移動

鎮静効果がみられた後（10分程度）に、殺処分場へ移動させる。本病に感染し、蹄病変がある場合でも、鎮痛効果により移動が容易になる。コンパネ等での囲いをする場合、その囲いの広さは動員者の人数により調整する。

(エ) 薬殺

保定器で豚を保定する。カテラン針またはベニユーラ針を使用して頸静脈もしくは心臓に薬液を20～60ml注射する。または21G針を使用して耳静脈から薬液を5ml注射する。豚が転倒後、検死を行い、重機により埋却地または搬出場

所まで運ぶ。

種雄豚の場合は、昏睡状態で21G針を使用して耳静脈から薬液を5ml注射する。しかし、死体の搬出が困難な場合は、沈静後に電殺を実施する。

哺乳豚の場合は、人力で前肢を上、後肢を下に引いて保定後、18G針を使用して心臓から薬液を10～20ml注射する。



(2) 電殺チーム（肥育豚舎の肥育後期豚、種雄豚舎の種雄豚）

ア 必要資材

- ① 電殺器：1台／1班
- ② と殺鉗子：1本／1班
- ③ 発電機（10A以上）：1台／1班
- ④ 20Lガソリン缶（ガソリン満タン）：1缶／1班
- ⑤ コードリール：1巻／1班
- ⑥ 金ブラシ：1本／1班
- ⑦ コンパネ（取っ手付き）：必要量
- ⑧ 前掛けまたは合羽ズボン：1枚／1班
- ⑨ 90Lゴミ袋：十分な量

イ 方法・手順

（ア）動員者は、コンパネで豚舎入口を囲むように、豚が20頭程度入るスペースを確保する。スペースの大きさは、農場ごとに異なり、動員者の人数も関係してくることから、予め検討しておく。コンパネを使う場合は、豚をスムーズに移動させるため、コンパネの陰に隠れるようにするとともに、豚の逃亡防止に努める。

（イ）獣医師は、電源を確保し電殺器を準備する。また、予備的に薬殺用のシリンジ及び注射針等を準備する。

（ウ）殺処分の準備ができ次第、保定者は作業スペースへ豚を移動させる。オガコ豚舎は豚房が広いことから、豚の習性を理解している動員者の指示に従う。

（エ）獣医師は、豚が絶対に逃亡しない状態であることを確認し、電殺を開始する。頭部への通電により豚を気絶させた後、薬殺を行うと短時間での処分が

可能になる。

(オ) 種雄豚に対しては、移動前にメシル酸マホブラジン製剤を10ml注射する。

また、沈静後も移動の際は注意する。

(カ) 電殺器は、と畜場の職員等、扱いに慣れている者でも使用可能であるが、不慮の感電事故には十分留意する。



(3) ガス殺チーム（離乳豚、肥育豚舎の肥育前・中期豚）

ア 必要資材

- ① 炭酸ガスボンベ：1本／1回（産廃用特装車の場合）適量
- ② ボンベ用キャリア
- ③ ガスコック：2個／1班
- ④ レンチ：2個／1班
- ⑤ スパナ
- ⑥ スノーホーン：1または2本／1班
- ⑦ ガス部屋（ケージにブルーシート、フレコンバッグ、産廃用特装車等を利用して作成する。）
- ⑧ 豚搬出用ケージ（ヒンジ式フォークリフト必要）
- ⑨ ゴミ袋：十分な量

イ 方法・手順

(ア) 豚舎入口に、フォークリフトに取り付けた移動用鉄製カゴ（以下「ケージ」という。）を横付けする。豚が逃亡しないよう、豚舎とケージの隙間はコンパネで遮蔽する。

(イ) 保定者は、ケージへ豚を移動させる。オガコ豚舎は豚房が広いことから、豚の習性を理解している動員者の指示に従う。ケージに移動させる頭数は、フォークリフトの能力及びケージの大きさを勘案し、予め検討しておく。大型のケージの場合、肥育中期で15頭前後、離乳豚で30頭前後は積載可能。

(ウ) 保定者2名がケージに残り、ダンプの上まで移動した後、ダンプ内へ豚を落下させる。

なお、ヒンジ式フォークリフトであればケージに残る保定者は不用。また、他の保定者は、次の豚の移動を開始する。

(エ) ダンプの積載量に合わせて、イ及びウの作業を繰り返し豚を移動させる。

炭酸ガス注入時、豚が跳ね上がることがあるため、過積載にならないよう注意する。また、悪天候等により埋却地までの連絡道路が悪化している場合は、ダンプ運転手の指示により積載頭数を調整する。

(オ) 豚が積載されたら、ダンプごとブルーシートで覆い、密閉する。スノーホーンを隙間からブルーシート内に入れ、炭酸ガスを1本すべて注入する。この際、垂直方向でガスを注入すると、豚に当たったガスがスノーホーンへ逆流し、目詰まりの原因となるため、やや水平方向に注入するよう心掛ける。また、ガスの注入時にはブルーシートの隙間から洩れ出てくる炭酸ガスを吸入しないよう十分留意する。

(カ) ガス注入が終了したら、ブルーシートを外しガスを発散させた後、豚の死亡を確認する。豚が生存していた場合には、薬殺により処分する。

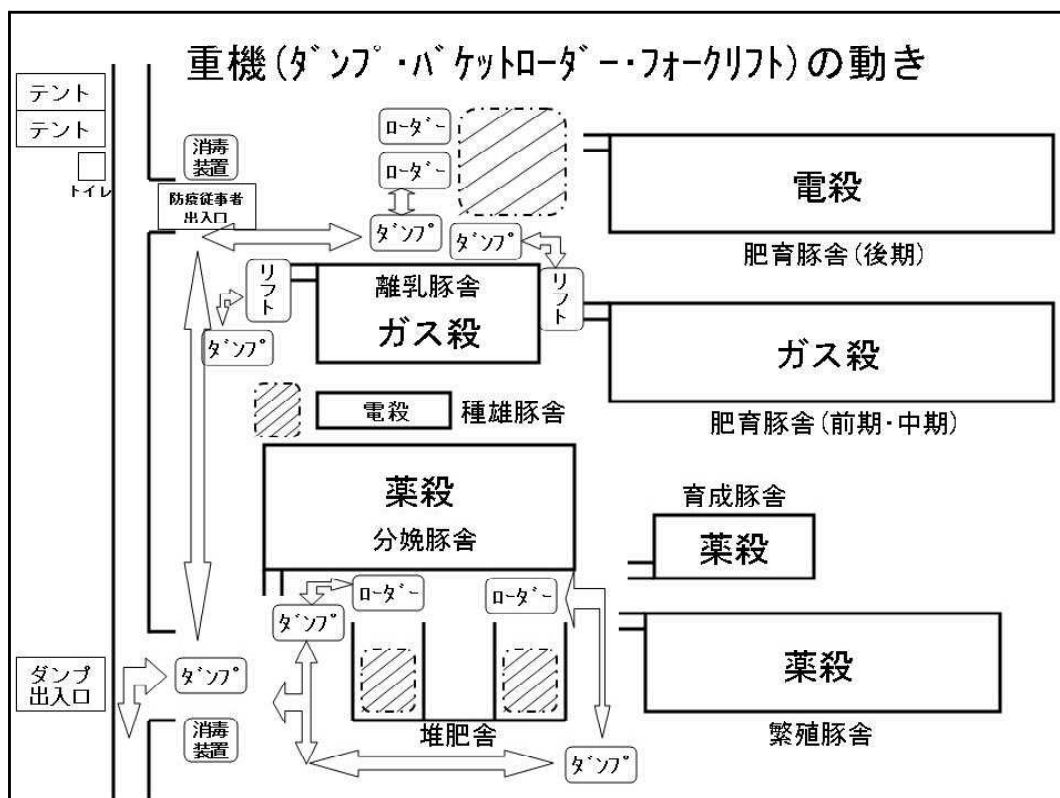


【ケージに乗せ特装车へ】



【ブルーシートで覆い炭酸ガス注入】

8 殺処分時の重機の動き



ウイルスの散逸防止のため、搬送用ダンプの出入り口は1箇所とし、防疫従事者の出入り口と極力区別する。家畜防疫員または畜産職リーダーは、ダンプ搬送の空き時間が発生しないよう、それぞれの殺処分チームの作業状況を把握し、的確なダンプの誘導を行う。また、多数の防疫従事者が作業をしている中での運行となるため、接触事故等、不慮の事故には十分注意する。なお、最大規模養豚農場の動員計画は参考資料に掲載。

表10 豚における殺処分方法の長所と短所

		薬殺	電殺	炭酸ガスによる窒息
最低必要動員数 (1班当たり)		薬殺：10人程度 コンパネ：10～15人 追出：5人	電殺：3人 コンパネ：10～15人 追出：10人	少ない（5人程度） コンパネ：0～5人 追出：15人
逃走の可能性		低い	高い	低い
作業安全性		高い (豚保定器で保定 するため)	低い (挟み方が半端な場 合には豚が暴れる)	高い (ボンベが90kgと重い ため転倒すると危険)
作業の難易度		高い 豚経験獣医が必要	低い 獣医でなくても可能 しかし、慣れが必要	低い 獣医でなくても可能
作業者の精神的負担		比較的軽い	比較的重い	比較的軽い
資材量		少ない	多い	少ない (ボンベは業者回収)
資材種		多い	少ない	少ない
ゴ ミ		かなり多い	少ない	少ない
作 業 効 率	哺乳・子	良い	悪い	最も良い
	肥育前期	良い	良い	最も良い
	肥育後期	良い	良い	良い ※
	母	良い	良い	良い ※
	種雄	悪い	良い	良い ※

※ リフトで移動可能な出荷カゴと特装ダンプを用意できることが前提

(3) いのしし(電殺)

(ア) 準備資材

- ① 電殺器：1台／1班
- ② と殺鉗子：1本／1班
- ③ 発電機（10A以上）：1台／1班
- ④ 20Lガソリン缶：1缶／1班
- ⑤ コードリール：1巻／1班
- ⑥ 金ブラシ：1本／1班
- ⑦ ケージ
- ⑧ ロープ（6mm×100m）
- ⑨ 前掛けまたは合羽ズボン：1枚／1班
- ⑩ ゴミ袋：十分な量